

國學院大學學術情報リポジトリ

香取神宮神幸祭絵巻

『香取神宮神幸祭絵巻』とその諸本

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 笹生, 衛 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002332

『香取神宮神幸祭絵巻』とその諸本

笹生 衛

一、香取神宮の神幸祭

香取の神 古代以来、東国を代表する古社として、茨城県鹿嶋市の鹿島神宮とともに篤い信仰を集めてきたのが、千葉県香取市の香取神宮である。古代には、鹿島神宮、千葉県館山市の安房神社と並び神郡が設定され、律令国家にとって重要な神社であった。

『日本書紀』神代下第九段第二の一書は、葦原中国の平定のため武甕槌神と経津主神が遣わされたとし、あわせて「是の時、齋主の神を齋の大人と号す。此の神、今東国の楳取の地に在す」と書く。また、大同二年(八〇七)の『古語拾遺』には、「経津主神(これ、磐筒女神の子、今下総国香取の神これなり)・武甕槌神(これ、甕速日神の子、常陸国鹿島の神これなり)」とある。香取神宮の神は、鹿島の神「武甕槌神」とともに葦原中国の平定を行つた経津主神であり、その坐す地は香取Ⅱ「楳取の地」であるとの認識が、八・九世紀には、すでにあったのである。

また、香取を、船の楳取りに通じる「楳取」と表記する点も重要で、香取の神と水上交通との密接な関係がうかがえる。

御舟祭と神幸祭 これと関連する鹿島(香島)の神

の説話が、古風土記の一つ『常陸国風土記』にある。同風土記の香島郡条が記す「御舟祭」の起源説話である。倭武天皇(日本武尊)の時代、香島の天の大神(香島の神)は、中臣巨狭山に「今、社の御舟を(吾が御座船を用意せよ)」(中村、二〇一五)との託宣を下した。託宣の神意により毎年の七月、北浦に面する大船津の「津宮」へと三隻の舟を奉納するようになった、というものだ。「津宮」へ船三隻を奉納する御船祭の形が、ここで確認できる。

「津宮」へ三隻の船を奉納するという形は、じつは香取神宮の神幸祭と同じである。先に見た通り、古代以来、香取の神は、鹿島の神とともに信仰を集めてきた。そして香取を「楳取」と表記し、水運・船との密接な関連もうかがえる。このような背景を考えると、香取神宮の神幸祭は、鹿島の神の御舟祭と同じく、香取の神と船・水上交通とのつながりを象徴する、古代以来の祭として位置づけてよいだろう(鈴木、二〇〇九)。

二、神幸祭絵巻の世界

神幸祭絵巻の諸本と分類 現在、香取神宮の式年神幸祭は、十二年ごとの四月に斎行されているが、かつては、旧暦の三月に行われていた。香取の海

(現在は利根川)に面する「津宮」つのみや「膽男」たまりお「忍男」おしのの三社へと、三つの船木を奉納するもので、船木は奉納する船を象徴する。三隻の船を津宮へ奉納するという、『常陸国風土記』香島郡条の御船祭と同じ構成となっている。この様子を描くのが、『香取神宮神幸祭絵巻』(以下、「神幸祭絵巻」)なのである。

「神幸祭絵巻」には、現在、七種類の写本が知られており(千葉県美、二〇一五)、その特徴から、次のA・Bの二群に分類が可能である(笹生、二〇一五)。

◎A群Ⅱ①「権檢非違使家本」(紙本)、②「香取神宮本(旧多田家本)」(紙本)、③「日本民藝館本」(紙本)、④「彰考館本」(紙本・焼失)。

A群の特徴Ⅱ建物の構図は不正確でゆがみがあり、人物の描写は堅く、一部は稚拙な印象を与える。一方で、主要な人物と建物・施設に注記を施している。また、「権檢非違使家本」の神輿(降り棟先端の燕が四羽)と正神殿(柱上の龍頭)の表現は、文永八年(一二七二)遷宮の「香取社造営注文」と整合する(鈴木、二〇〇九)。さらに「権檢非違使家本」には永正十三年(一一五六)の奥書があり、内容は中世に遡るとみてよいだろう。

◎B群 ⑤「大禰宜家本」(紙本)、⑥「成田山仏教図書館本」(紙本)、⑦「國學院大學本」(絹本)。

B群の特徴 ②建物、人物などの表現・構図が正確で描写は細かい反面、人物、建物などへの注記は全くない。特に「大禰宜家本」「國學院大學本」は、全体に極めて丁寧に描きこまれている。ただし、折烏帽子や随兵の具足の形状には近世的な特徴が見える(表紙参照)。

絵巻の構成 神幸祭絵巻の主題は、香取の神が、香取の海辺、津宮に向かう行列にある。これら諸本の中で、全体構成を確認できるのは、A群の「権檢非違使家本」と、B群の「大禰宜家本」である。

この二点の絵巻は、ほぼ共通した構成で、以下の八つの情景が次々に展開する祭礼行列を描く。

①香取の海辺―冒頭は、香取の海の岸辺に並び建つ「津宮」「膽男」「忍男」の三社の景観。

②捧げ物と前駆の一団―捧げ物は、御船木を先頭に、八龍神(竜神を描いた鬘まげ)、大盾、神馬がつづき、その後を「田吟たながし」、「押領使おしりょうし」、「正・権檢非違使ただし」、「酒司さけに」の社家(神職)が前駆集団をつくり神幸行列の全体を先導する。

③神宮寺の伽藍と門前―香取の神の本地仏、十一面観音の巨像を本尊とする金剛宝寺。その門前で行政官の国司代と、地頭(武士)の官介が、神幸行列を臨視する。

祭祀の実施は、国の安寧を保証する「まつりごと」を具体的に示す行為であり、祭祀の執行に国司が責任をもつという考え方が、古代以来

の行政理念にはあった。下総国の行政権を代表する国司代が臨視する(祭礼の無事な執行を見届ける)ことは、それを象徴するものである。

④騎馬姿の上級神職(副祝・大祝・物申祝)、内院神主(八人)、女性神職(物忌・八乙女)の一団―前駆集団につづき、八人検杖の先導のもと、男女の神職が騎馬で進む。

「大祝」以下、男性の上級神職は衣冠を着用、女性神職の物忌・八乙女は、白衣に市女笠をつける。物忌は、古代以来、香取神宮の祭祀で重要な存在である。

⑤獅子と歌人の一団―獅子は二匹。神楽を奏でる人々(腰鼓をつけた四人、鈴と鼓を手に拍子を取る八人女、横笛・銅拍子どびょうし・太鼓を鳴らす歌人)が、一群を作り神輿を先導する。

⑥神輿―香取の神が乗り、白丁の駕輿丁が担ぐ。神輿は、屋根に金色の鳳凰がのり、降り棟の先に燕をつけ、軒先に幡を吊るす。本体には多数の鏡・御正体を下げる。

⑦中核となる神職の一団―大神主の先導で、衣冠に威儀を正した権禰宜・大禰宜・神主が随兵を従え、神輿に供奉する。香取神宮で最上位の神職の一群である。

⑧留守役が残る香取神宮境内―楼門・中門、正神殿などの境内の建物を描写する。楼門には仁王像があり、廻廊がつく。正神殿の棟には鳳凰がのり、正面の縁には獅子・狛犬を置く。元禄十三年(一七〇〇)に建築された拝殿はない。



神馬(上)、正神殿(下)
〔香取神宮神幸祭絵巻〕

絵巻の成立 では、「神幸祭絵巻」の内容は、いつ成立したのだろうか。これを考えるには、「権檢非違使家本」の次の奥書が参考となる。

永徳年中に至るまでは、かくの如く御神事退転無きものなり。／右、件の目録に於ては、建仁二年帳を以て、至徳三年に誌を改むるものなり。然れば、また虫喰損に依り、至徳三年の帳を以て、当時その旨に任せ録を改むるの処なり。尤も後代の証拠たるべきの故なり。よって件の如し。／永正十三年八月廿一日之を写しをはんぬ。案主／田所／録司代／大禰宜散位大中臣真之

この奥書によれば、「神幸祭絵巻」の内容・構成は、十三世紀初頭、建仁二年(一一〇二)までには成立していた可能性が高い。そして、絵巻の正本(祖本)は、至徳三年(一二八六)に改められ、虫損により永正十三年(一一五六)に再び改め写本が作られていたことになる。「神幸祭絵巻」の内容は、鎌倉時代初期まで遡ると考えられる。

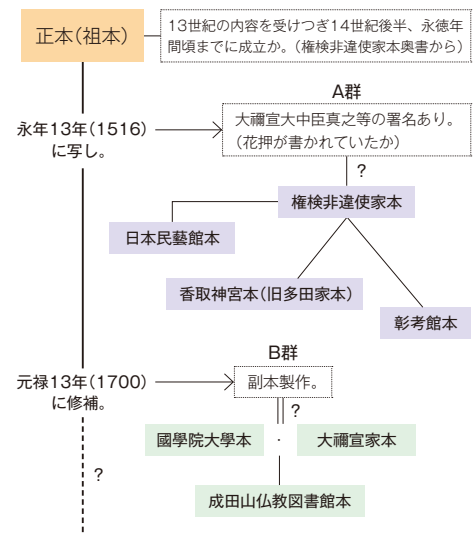
二、神幸祭絵巻の歴史的な背景と意義

絵巻の諸本系統 絵巻の諸本のなかで、A群を代表する「権檢非違使家本」は、奥書から永正十三年の写本の系統に含まれる。同じ内容の「彰考館本」は、この忠実な写しだろう。ただし、「権檢非違使家本」は、奥書末尾の署名に花押がないため、永正十三年の写本そのものではなく、その写しの一つである可能性は考えておかなければならない。また、同じA群の「香取神宮本(旧多田家本)」と「日本民藝館本」も、永正十三年の写本の写しと考えるべきだろう。

これに対し、B群の諸本、特に丁寧に描かれた「國學院大學本」と「大禰宜家本」については関係すると考えられる史料がある。次に示す、色川本「源太祝家文書」の「香取社御幸絵巻軸跋写」である(『千葉県の歴史』資料編中世2、県内文書1)。

右御幸絵図、すなはち古より伝はるところなり。蓋し、その神輿の出でる儀列の厳なる固より祭祀の大なるものにて、此の図に就きて、また、その盛んなるを見るべし。至徳年間は、なほ、これを行ふあり。しかるにその後、絶へぬ。今、その図毀損するを以て、官これを修補せしむ。また、その式様、一図を別に造り、以て副とし、各、これを巻軸と為すと云ふ。／元禄十三年庚申秋九月 日／大禰宜讚岐守胤雪 識。

現在の本殿などを造営した元禄十三年、絵巻の



第1図『香取神幸祭絵巻』諸本系統図

祖本が毀損していたので、修復し副本を製作したとの内容だ。B群「大禰宜家本」「國學院大學本」の特徴の一つに近世的な表現があり、丁寧で細かな描写をあわせて考えると、これらは、この跋文が記す、元禄十三年に製作した副本、もしくはその正確な写本である可能性が高い。特に、「國學院大學本」は、現在、確認できる絵巻の中で唯一の絹本で、金泥・銀泥を使用、「大禰宜家本」以上に細かな人物描写が見られる。ここから、「國學院大學本」が、この副本に最も近い存在とみてよいだろう。

以上の検討結果から、A・B群の諸本系統は第1図のように整理できる。**使う絵巻と観る絵巻** では、なぜ「神幸祭絵巻」には、特徴を異にするA群とB群という二つの系統が生まれたのだろうか。そこからは、絵巻の異なる性格がうかがえる。

A群の性格は、「権檢非違使家本」の袖書から明確となる。袖書には「当日の共(供)奉の事、次第は堅く此の図籍に任せ、後日の異論に及ぶなかれと云々」とある。この絵巻は、神幸祭で誰がどの様な装束を着け、どこに並ぶかという情報を、正確に伝えることを目的に製作されていたのだ。ここに、人物などに加えた注記の意味がある。A群の絵巻は、まさに神幸祭を行うために「使う絵巻」としての性格をもっていたのである。

一方、B群の性格は、「香取大禰宜家日記」(『史料纂集 古記録編一〇一』)元禄十三年八月七日にのせる、寺社奉行への窺い書きの次の一節で推定できる。

一、当社惣絵図ならび祭礼の巻絵図、先達て御披見にも入れ奉り候。殊のほか損じ申し候。是は御神宝同前の儀に御座候あひだ、御修理料金を以て修覆ならび写し等を加へつかへまつり差し置き申したく願ひ奉り候事。

ここの「祭礼の巻絵図」は「香取神宮神幸祭絵巻」、「当社惣絵図」は「香取神宮境内古絵図」に当たる。絵巻と境内絵図を「御披見にも入れ奉り候」の上で、修理し写し(副本)を作っており、先の跋文の内容と整合する。この記事内容に加え、B群「國學院大學本」「大禰宜家本」の丁寧で美しい描き方からは、B群は観賞用の絵巻、「観る絵巻」という性格が考えられるだろう。B類の絵巻は、祭礼行列が盛んであった往時を美しく華やかに伝えるという役目を担っていたのである。

神幸祭絵巻と祭礼行列 もう一つ、「神幸祭絵巻」

には、大きな歴史的な意義がある。それは、中世初期、東国の一宮で行われた祭礼、特に神幸行列の実態を伝えている点だ。神幸行列の構成は、先頭に捧げ物(船木・神馬など)、つづいて神輿を先導する獅子と神楽、神霊が乗る神輿、その後ろに中核となる神職が供奉する、という形である。

この構成は、十二世紀中頃、永万元年(一一六五)頃に成立した『年中行事絵巻』が伝える「稻荷祭」や「祇園御霊会」の祭礼行列と同じである。これらの祭礼は、岡田莊司氏が触れておられるように(岡田莊司「御旅所祭祀」参照)、平安京中を神輿が御旅所へ渡御する「御旅所祭祀」の典型例である。共通点は、行列の構成だけではない。「祇園御霊会」の鳳輦・神輿の形状、降り棟に燕を付け、瑞垣で囲む構造は、神幸祭絵巻の神輿と共通し、市女笠



獅子・八乙女(上)、神輿(下) (『香取神宮神幸祭絵巻』)

をかぶる騎馬の巫女は、同じ姿の物忌・八乙女に対応する。さらに、「稻荷祭」で騎馬の巫女が差す風流傘は、「神幸祭絵巻」で上級神職に差し掛ける風流傘と類似する(表紙参照)。

「神幸祭絵巻」の内容は、「権檢非違使家本」の奥書から、建仁二年(一一二〇)まで遡ると考えられ、『年中行事絵巻』との年代的な隔たりは少ない。「神幸祭絵巻」が描く祭礼行列には、平安時代末期の平安京で行われた都ぶりの祭礼行列が多分に影響を与えていたと考えるべきだろう。下総国一宮である香取神宮の神幸祭は、国司代の臨視があったように下総国司と密接に関係した。東国の祭礼に都ぶりの要素を持ち込んだ背景には、この国司と一宮とのつながりを考えるべきだろう。

まとめ

香取の神は、鹿島(香島)の神とともに、東国の水陸の要衝、香取の海に面して祀られた国家的に重要な神であった。鹿島神宮では「津宮」へ船を奉納する「御船祭」が、その神格を象徴する祭りであり、この伝統は、香取神宮の場合、「神幸祭」として古代から中世へと受けつがれた。その中世の盛儀を今に伝えるのが、『香取神宮神幸祭絵巻』なのである。

そして、「神幸祭絵巻」は、祭礼研究の新たな可能性を秘めている。従来、祭礼研究は、民俗学的な研究が主流であった。そのような中で、年代を確定できる絵画資料で、都から地方へ祭礼の構

成が伝わったことが確認できる事例として「神幸祭絵巻」の価値は、極めて高い。「神幸祭絵巻」が描く祭礼行列の構成は、現在でも各地の神輿渡御にみられるものだ。「神幸祭絵巻」の分析をもとに、現代の祭礼へと新たな視点で光を当てれば、中・近世以来の歴史的な背景と意味を明らかにすることが可能となるのではないだろうか。今後、この視点での研究を進めてみたい。

【参考文献】

- ・香取神宮社務所編『香取群書集成』第三卷(香取神宮社務所、一九八〇年)
- ・香取神宮史誌編纂委員会校訂『史料纂集 古記録編一〇一 香取大禰宜家日記第一』(統群書類従完成会、一九九五年)
- ・(財)千葉県史料研究財団編『千葉県の歴史資料編 中世2(県内文書1)』(千葉県、一九九七年)
- ・(財)千葉県史料研究財団編『千葉県の歴史 通史編 中世』(千葉県、二〇〇七年)
- ・鈴木哲雄『香取文書と中世の東国』(同成社、二〇〇九年)
- ・『平成二十七年特別展 香取神宮―神に奉げた美―』(千葉県立美術館、二〇一五年)
- ・中村啓信監修・訳注『風土記上』(KADOKAWA、二〇一五年)
- ・笹生 衛『香取神宮の歴史と祭り―古代・中世の信仰と「神幸祭絵巻」を中心に―』(『平成二十七年特別展 香取神宮―神に奉げた美―』)